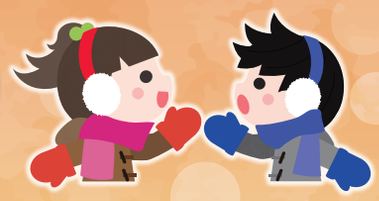
120周年記念号

二葉とこども

第28号



～キリスト教精神にもとづき、子どもたちの未来と地域福祉の向上に努めています～

社会福祉法人二葉保育園は

2020年1月10日に創立120周年を迎えます

今号は120周年を節目として、各施設でのこれまでの取り組みを振り返り、これからを展望する機会としました。

創立120周年記念事業　参加者募集中です

詳細は当法人ＨＰを御覧ください。電話でのお問合せ・申込もお受けしています。（裏表紙記載の法人本部まで）

○「**ふたばフォスタリング・フォーラム**」2020年１月11日(土)13：30～16：30二葉南元保育園３階ホール

●里親支援事業の取組みと今後についての講演・実践報告・パネルディスカッション等　●終了後に交流会

●参加費　フォーラム(資料代等)1000円・交流会500円〔事前申込制・先着60名〕当日払い

○(社福)**二葉保育園120周年記念会**

●「実践報告会」2020年２月１日(土)13：30～15：15主婦会館プラザエフ

参加費無料〔事前申込制・先着20名程度〕

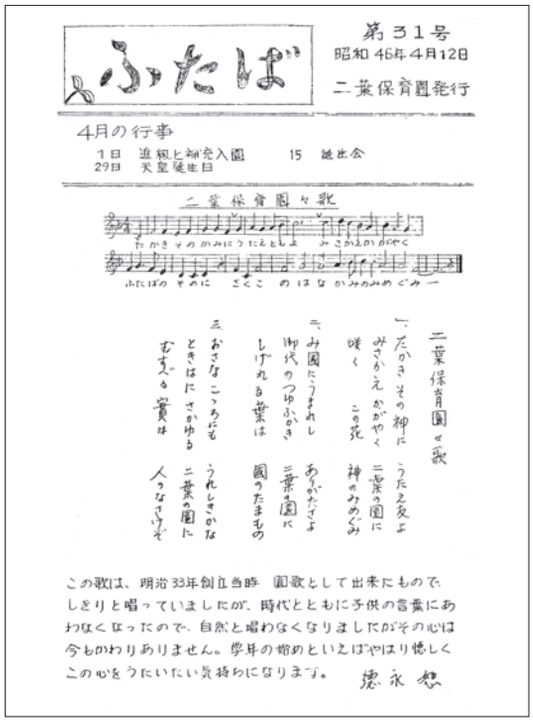
●「交流会」2020年２月１日(土)15：30～17：00主婦会館プラザエフ

参加費5000円〔１月20日までの事前申込制・前払い・先着20名程度〕申込頂いた方に振込先を連絡します。

○「**ふたば女性と子どもの応援フェア**」2020年２月15日(土)13：30～16：30牛込箪笥区民ホール*

●女性の心身のケアや健康とダイエットの両立等についての産婦人科医等の講演、骨密度測定・相談等

●参加費無料〔事前申込制・先着200名〕　※地下鉄牛込神楽坂駅直結・徒歩１分



ふたば

第31号
昭和46年4月12日
二葉保育園発行

4月の行事
1日　進級と神充入園　15　誕生会
29日　天皇誕生日

二葉保育園々歌

たかきその神にうたえよ　みさかえかがやく
ふたばのそのに　さくこのはなかみのめぐみ

二葉保育園々歌

一 たかきその神にうたえよ
みさかえかがやく　二葉の園に
咲く　この花　神のみめぐみ

二 み園にうまれし　あかたさよ
御代のつゆふかき　二葉園に
しげれる葉は　國うたまもの

三 おさなこころにも　うれしきかな
ときはにさかゆる　二葉の園に
むすべる實は　人うなさけぞ

この歌は、明治33年創立当時　園歌として出来たものでしきりと唱っていましたが、時代とともに子供の言葉にあわなくなったので、自然と唱わなくなりましたがその心は今もかわりありません。學年の始めといえばやはり懐しくこの心をうたいたい気持ちになります。　徳永恕

二葉乳児院

120周年を超えて、乳児院のこれから

乳児院は、1947（昭和22）年制定（翌年施行）の児童福祉法の第37条に基づく施設です。二葉乳児院の前史を振り返ってみると1900（明治33）年１月から私立の幼稚園として開始し、16年後に新宿に旭町分園を置き、本園のこの南元町にて事業を展開しています。1945（昭和20）年の東京大空襲で被災後、旭町分園のみで運営を行う中、1946（昭和21）年から乳児部（児童福祉法制定前であり、乳児院ではなかった）を開設しました。

終戦後の大混乱の中、戦災孤児や食べるものも困る中での乳児部の開設は、二葉の歴史の中でも大きな責任のもとの事業であったと考えます。

終戦直後は、最大規模で出生数も270万人を超えていた時代背景でした。本法人の85年史を見てみると昭和20年代の入所は棄児の55名、貧困就労の55名が突出していて総入所116名でした。昭和30年代は、棄児が20名、貧困就労が21名と減って来て家族の疾病や家出がそれぞれ12名、11名となって総入所が90名でした。昭和40年代に入ると棄児は28名となり、家族の疾病が82名と多く、次に次ぐのが家出の73名、母の精神病49名、別居離婚44名と続き、総入所が342人と大幅に増えていることが分かります。昭和50年代で棄児は22名、家族の疾病が83人と40年代と同じく１位ですが、次いで、次子出産が51名家出37人、その他が60名となっています。昭和60年代、平成10年代も棄児がごく少数になり、年に2名ほどであり、2019（令和元）年の今年は、１名もいない状況でした。

ここ10年ほどの中では、被虐待の乳幼児の入所が増えています。一貫して母親の精神病という表現は少なくなっているものの疾病という枠組みで入所になっている人数は多いです。また入所「措置」が減っている傾向にあることから、一時的に保護された乳幼児を見ていく施設になっていくのでないかと考えています。

一方、退所については、昭和20年代は親戚親元が25名、養子里親が10名、施設変更が40名、死亡が23名の合計98名。30年代は、親戚親元が59名、養子縁組が15名、施設変更が18名、死亡が2名の合計94名。40年代は、親戚親元が249名、養子縁組16名、施設変更53名、死亡が１名の319名。50年代が272名の親戚親元、養子縁組12名、施設変更62名、死亡０名の346名となっています。20年代の死亡数は、戦後の下栄養も医療的にも行き届かない瀕死の状況があったと考えられますが、その多さに改めて驚かされます。親戚を含めて親元への引取りの数が40年代、50年代は80%近く、平成30年の60%よりはるか高い数字が出ているのも、時代背景です。

このように、戦後の時代に始まった乳児院の数字を並べて考えると、目の前の乳児を育てることにとにかく精一杯であったのではないかと想像できます。平成14年に建替えを行い、更地にした現在地に地域子育て支援センターを付設した乳児院を開設しました。時代は、少子高齢化へと向かう中での地域の在宅育児家庭への支援も担おうとの思いで、準備を行い、翌年に一時預かり事業や子育てひろば事業を開始しました。その後、都の里親支援機関事業や新宿区をはじめ合計５区のショートステイ事業を受託し、乳児院を核にしながら、地域の子育て支援の中核を担えるよう、様々なプログラムを実践しています。このような取り組みによって年間での利用が１万件に上る「ひろば」は未就園児の親子が交流し、子育てについて学び、相談できる「地域の実家」のような場として親しまれ、ショートステイ事業は保育者の入院、育児疲れ、冠婚葬祭などの時に利用され、核家族での子育てを支えています。子育て中で外出出来ずにいる家庭へホームスタート事業という家庭訪問型のサービスも展開し、昨年から妊産婦の家の訪問も開始し、アウトリーチにも力を入れています。里親家庭への訪問や研修開催、リクルートといった里親支援機関事業の受託も10年の経験を重ねて、国の目指すフォスタリング機関として着実に発展してきています。

こども一人ひとりの幸せと健康を願って、これからも130年、140年と子ども達の保育や養育の実践を築いていきたいと考えています。

二葉学園が今後目指す方向性

二葉学園は、全国に先駆けていわゆる大舎による養育から、グループホームや地域小規模児童養護施設等の実践をすすめるなかで、個別化、小規模化、地域化に取り組んできました。

二葉学園におけるグループホーム実践は、1978（昭和53）年度の基本構想の検討から始まりました。当時、家庭復帰が出来る子どもたちは、積極的に家庭復帰を推進する一方で、家庭関係が薄い子どもたちは学園で常に生活することになり、「何で、私たち、俺たちは家に帰れないのか」との不満となり、また将来への不安から不安定な生活となってしまっている状況も散見される状態でした。また、親との死別や、親の行方不明を経験している子どもたちもいて、施設生活の長期化が予想される子どもたちには、より小集団による家庭的な生活環境が望ましいのではないかという考えのもと、国や東京都で制度化される前からグループホームの実践に取り組んできました。

その実践を通じ、子どもや職員の声を聞き、グループホームを増やしてきました。なにより子どもたちのニーズに向き合いそれを捉え、方向性を定めて実践してきました。グループホームはいずれも２階建ての一軒家で、現在、調布市に５ヶ所、府中市には今年開設したさくらホームを含め３ヶ所のグループホームを運営し、調布市にある本園の２つのユニットと合わせて、地域に点在する10のホームで子どもたちは職員と生活しています。

生活のなかで子どもたちのニーズに向き合い、一緒に取り組むことはこれからも変わりません。その中で子どもたちが「大事にされている」実感を獲得して欲しいと思っています。

これまで施設養護として小規模化、地域分散化をすすめてきた二葉学園ですが、今後はより地域の子育て支援に取り組んでいくことが必要だと考えています。現在、狛江市、府中市、多摩市から子ども短期子育て支援事業（子どものショートステイ事業）を受託し実施しています。保護者の方の病気、遠方への出張、高齢者の看護や介護などで一時的にお子さんを世話できなくなったときに利用されており、核家族での子育ての大変さ、地域の子育て支援の重要性を改めて感じます。

施設内のホールで実施しているリラックスヨガも好評です。このような地域の方々との交流を増やして、私達の経験・知識を活かした子育てのアドバイスなど、育児不安の解消や子どもの虐待の予防などにつなげていかれればと思います。

また、地域で暮らす里親さんや子どもたちへの支援にこれまで以上に力を入れるとともに、里親の皆さんの活動を一緒にPRしていく必要性を感じています。

更に今後、求められる施設機能は、様々な状況や課題を抱えた子どもたち（ほとんどは一番身近な大人から不適切なかかわりを受けた経験をもっている）に、望ましいサービスや支援ができることだと思います。具体的には困難な課題を抱える入所児童へのより専門的なケア（虐待等の影響から愛着に課題を抱え、精神的なトラウマやフラッシュバックに悩まされたり、自傷行為を繰り返したりする子どもたちへのケア）が出来ること、そして、その子どもたちの自立支援やアフターケアが十分にできることだと思います。そのためには、フレンドホームの皆さんや二葉学園の卒園生らもメンバーになっている「NPO自立へのかけ橋」など、外部との連携も重要です。

二葉学園の目指す「総合的な子育て支援施設」のイメージを具体化していきたいと思います。

夏の恒例行事のキャンプ

二葉むさしが丘学園

変えられないものと変えなければならないもの

社会福祉法人「二葉保育園」が120周年を迎える、2020(令和２)年。二葉むさしが丘学園は東京都からの民間移譲後新しい施設となって、10年目を過ごそうとしています。早いもので、まだ旧園舎だったあのころ、将来のことなんて考える余裕もなく、目の前の一日をどう過ごすかに悪戦苦闘していた日々から、もう10年も経つのかと思うと感慨もひとしおです。当時のことを知る子どもたち、そして職員も少しずつ入れかわり、新しい仲間がたくさん増えていきましたが、それでも私たちが大切に守ってきたものがあります。それは、理念の中にも謳われているように“話し合いの文化を育てて子どもとともに生活をつくる”と言うことです。

一見簡単なことのように見えますが、何事も話し合いで決めていくことは、とても大変で時間がかかることでした。時には果てしない議論の末に答えを見つけられないこともありました。「話し合いの文化」って何だろう？と言う疑問にそれぞれが悩み、苦悶してひねり出した答えはそれぞれがバラバラだったなどという経験も、一度や二度ではありませんでした。それでも、私たちは話し合うことを大事にし、また、みんなで生活を作っていくことを大切に守ってきました。回数を重ねるごとに経験が蓄積されていき、今では子どもたちにも自分の考えていることを提案し、話し合って実現するということが、浸透してきています。

児童養護施設には“あたりまえ”であるはずのことがそうでなかった生活をしてきた子どもたちが少なくないのです。彼らにとって、ひとつしかない答えに縛られれば、当然のことながらあるべき姿を追求することしか出来ず、目の前の新しい道を見逃してしまうことが多かったのではないかと思います。ひざや頭をつき合わせ、喧々諤々と議論を重ねて見つけたこの新たな道こそが、彼ら、そして私たちが前に進むために必要なものでした。そのことに気づけたことは、この10年間で積み重ねてきた、新しい施設を作っていくための確固たる土台となっているのだと思います。

２０２０(令和２)年は社会的養護という状況下で暮らす子どもたちにとっては、大きな変化の及ぶ年でもあります。国から、今後施設がどう変わっていかなければいけないか、ということについての方針が示され、それに基づいた東京都の計画が策定されます。

家庭養育優先により里親委託率の数値目標が示され、施設の小規模化ならびに地域小規模児童養護施設等(以下グループホーム)による地域分散化が進められようとしていることは、施設で暮らす子どもたちにとって、生活に大きな変化をもたらすものとなるでしょう。

また、東京都では先行３区と呼ばれる３つの区(世田谷、荒川、江戸川)で、児童相談所が開設され、その他の区もそれに続いていくことが予定されています。これらは、児童養護施設の運営ならびに地域の子育て支援に大きな影響を与え、児童養護施設の役割や機能を変える可能性があると言われています。二葉むさしが丘学園でも「新しいグループホームの開設」「一時保護委託枠の拡大」「地域の里親支援」など今までにない新しい取組みの検討を始めました。

このように、大きく変わる時代の流れの中で、日々成長する子どもたちに私たちは何ができるのか？変えてはいけないことは何で、変えなければいけないことは何なのか？施設一丸となって話し合い、答えを見つけていく。そんな施設を目指して、力を合わせていきます。これから先の１０年で起こることが、多くの人の幸せにつながることを願うとともに、未来に希望を持って、子どもたちと進んでいきたいと思っています。

数本が台風で倒れ、１本だけ残った桜と新しく植えた桜

二葉南元保育園

歴史の中で受け継いできたもの

二葉保育園創立当初から創立者野口幽香先生は、当時最新だったフレーベルの幼児教育を学ばれており、子どもたちを単に預かるのではなく、子どもの感性や能力を育むため、お遊戯など子どもの楽しいことはもちろん、家庭の手伝いの役に立つような縫い物なども組み入れた保育を行っていました。保護者にも衛生指導や住居提供など家庭支援も行ってきたことが文献に書かれています。

時代は変わり120年たった現在の二葉南元保育園も５年前に園舎を改築し2014（平成26）年の秋、新園舎での保育が始まりました。定員数は61名から110名になりましたが、創設者の想い「キリストの愛」を大切にした保育が受け継がれています。

まず、日々の保育の中では、給食の準備が整った時に、その日のお当番さんが中心になり、今日もみんなで楽しく過ごせたことや心をこめて食事を作ってくれたことに共に感謝してから昼食を始めます。また、クリスマス祝会のキャンドルサービスや降誕劇は代々引き継がれてきている行事です。東中野教会の牧師先生に、行事の意味を話していただき、お祈りを捧げていただきます。

以前から変わらない取り組みの一つは、子ども一人ひとりを大切にし、子どもも保護者も安心できる第二の家庭のような場をめざした保育です。特に、乳児クラスは、発達や個性に応じたきめ細かい保育ができるよう、保育士配置を手厚くし小グループに分けた保育を行っています。また、夕方の延長保育は合同保育になりますが、テレビやビデオを観るといったことはせず、担当者が紙芝居の読み聞かせや遊具の提供などに工夫を凝らし、子どもに日中の疲れが見える場合には個別的なケアを心がけるなど、子どもの心身の状態に寄り添った対応をしています。

これまで受け継がれてきていることには、自然とのふれあいや食を大切にすることもあります。都会の真ん中にあっても緑に囲まれた公園へ散歩に出かけ、虫や植物に触れ、季節を通して自然から学び、自然の有難さ、触れる楽しさ、学べる喜びを、保育士も感じ感謝しながら保育しています。料理保育では、給食室と連携し年間計画を立て、プランターや屋上花壇での野菜づくりをし、２歳児はゼリーやお団子などのおやつ作り、幼児クラスはラップで自分のおにぎりづくりをしたり、ピーラーや包丁を使って野菜切りをしたり、実りと食への感謝を共有しています。

保護者の労働環境も変化しており、長時間保育化の傾向にあります。そのような中で、子育ての悩みを抱える保護者も少なくありません。さらに、保育園の保護者だけでなく、地域の子育て家庭の子育て支援も求められます。そこで、園に臨床心理士を配置したり、必要に応じて地域の公共機関と連携しながら子育て応援をしています。

今回、園舎に掲げた120周年の懸垂幕を見た保護者の方々から、疎開保育をテーマにしたミニ講演会と『あの日のオルガン』上映会開催の希望が寄せられました。二葉保育園も北関東で疎開保育をしていたことを振り返ると、戦前戦後の幾多の困難も乗り越えて受け継がれてきた保育の歴史が改めて感じられます。

120年同じ場所で同じように大切なものを守り続けてきたことで、地域の高齢者の方から声をかけられたり、卒園児や保護者の方が遊びに来たり、卒園児が保育士となって戻ってきたりと、ずっと同じ場所で続いて来たからこそ繋がっていると実感します。

時代と共に変化はしていますが、二葉の先代の方々がその時代や地域の特性を生かし役割に応じた保育をしてきたことを忘れず、子どもたちが安全に守られ安心して通える保育園を目指し、地域との関わりを増やし、今後は災害時なども助け合える関係をつくっていきたいと思います。

東中野教会浦上牧師を招いて、聖話のつどい

二葉くすのき保育園

創意をこらし築き、創り出していく保育

二葉くすのき保育園の前身は1916（大正５）年新宿旭町にあった二葉保育園新宿分園で、1948（昭和23）年12月に認可を受けました。二代目園長の徳永恕(とくながゆき)先生は「困っている母と子を助けるのが保母の仕事です。要望があれば、１月１日でも保育します。」という精神で、母子福祉が公の仕事になるずっと以前から困っている人々のために働き続けられた方でした。旭町時代には、園舎の老朽化に伴い、1953（昭和28）年より改築がはじまり、新宿御苑で野外保育を行っていた時期もあったそうです。

当時の保育士達が宿泊研修の中で、従来の行事中心の一斉保育や朝の集会、食前の挨拶も形式的に流れているのではないだろうか、など検討し、保育内容を全面的に見直すことになりました。この世の中に生まれてからのはじめの６年間、心から安心できる場所で生活をしながら自分(わたし)とそれ以外(あなた)の関係を育てていけるように、もっと子どもが自主的に行動する「あそび」を中心に考えることなど、現在につながる保育が築かれていきました。1971（昭和46）年には「わらべうた」※を導入した保育がはじまりました。

1969（昭和44）年頃から隣接の大同ビルが建設され、一層ビルの谷間の保育園になってしまいました。木造園舎の老朽化と太陽のいっぱい入る代替え地を望んでいた想いを受け、1976（昭和51）年、現在の都営調布くすのき団地建設にあたって保育園計画があったことから移転することになりました。1977（昭和52）年４月に「二葉くすのき保育園」として開園し、措置内定者の中に障がい児がいたこともあり、統合保育をはじめて実施したのもこの年でした。当時すでにはじまっていた父母の会と一緒に地域の福祉活動にも取り組む姿勢は、現在の地域活動事業の一環となっている、こどもまつりや秋の学習会（父母会と共催）にもつながっています。少子化・核家族化の中で子どもたちが、自由でやわらかい雰囲気の中で年齢の異なる子ども間における人間関係を育てていこうと、1997（平成９）年には異年齢児保育をスタートさせ、2000（平成12年）年には７時～18時までの11時間開所となり、翌2001（平成13）年には延長保育が実施され、７時～19時の12時間開所となりました。2003（平成15）年には在園家庭だけでなく、地域の子育て家庭に向けた地域交流事業を開始し、今も行なっています。

子どもが小さければ小さいほど、一人ひとり必要な寝る時間・食べる時間・排泄の時間は異なります。家庭と保育園を24時間で捉えて、担当保育士がその子のことをよく知り、言葉にできない気持ちも汲みとりながら育児をすすめていきます。

生活の流れが途切れることなく、次に何をするのか見通しをもて、先のことを予測できるということは、子ども達に安心感をもたらし、落ち着いた雰囲気をつくります。幼児期もゆったりとした雰囲気の中で「自分のできることから参加する」「見守られながら自分でする」「できた喜びを自分自身で感じられる」ことを大切にした保育を行っています。

また、子どもの生活の大部分を占めるあそびの中で情緒や身体の発達を助け、創造性を育てていくことができます。そのためにはあそぶ時間を保障すること、あそびやすい空間をつくること、年齢・発達・興味に合わせて遊具をつくったり、選ぶこと等を大切にしています。子ども達はその中で、自分の生活体験を再現したり、手先や頭を使い創造的なあそびをしたり、身体全体を使って運動的なあそびをします。ひとりでじっくりあそぶ姿も、友だちと関わりながらあそぶ姿もあります。集団あそびの中ではルールをつくったり、守ったりしながら社会性を学んでいきます。その子の発達のテンポを充分保障してあげられるゆるやかな環境の中で、子どもが知る喜び、発見する喜び、不思議だと思う気持ち、そして仲間と共有したいという気持ちを尊重しながら、子どもの心に豊かなものが育っていけるように心がけています。

時代の流れと共に子どもを取り巻く環境は変化していますが、二葉の歴史に学び、子どもの保育にとどまらず、保護者・地域の方々の置かれている状況を理解し、子どもを真ん中に家庭と園とが協働し合える関係性を大切にしていきたいと考えています。この先も、話し合い、課題と向き合いながら保育を創りだしていきたいと思います。

保育士が工夫を凝らして手作りしている壁面遊具

※子どもから生まれ、子どもたちがあそび、うたい続けることによって口承された「わらべうた」は、リズムと旋律・あそびが一体となって子どもに働きかけ、子ども自身が身近にいる人の言葉・声を通じて“音楽”を体験・想像していきます。すべての中心に子どもがいる「わらべうた」の伝承の力を保育に活かす取り組みです。

自立援助ホームトリノス　トリノスのこれまでの歩みと大切にしていきたいこと

自立援助ホームトリノスは、十数年の構想期間を経て４年前の2016（平成28）年４月に日野の地で青少年達の自立を応援すべく事業を開始しました。

自立援助ホームトリノスには、何らかの事情で家庭での生活が困難となった義務教育終了後の15歳から概ね20歳までの青少年達が自立を目指して生活しています。彼らが抱える問題は、社会の変遷とともに多様かつ複雑になっていると感じます。実際に現在までトリノスに入居してきた青少年は、一人ひとりがそれぞれの問題を抱え、少なからず本人自身の課題をかかえる中、その多くは家庭での適切とは言い難い養育環境に起因するのではないかと考えられます。その背景には貧困と言ったものから、子育てに対して関係機関との繋がりが持てず親が周囲に相談できないなどといった、子育ての孤立化が進んでいる環境もあるように思えます。

そのような環境の中で15歳を過ぎた青少年達に対し、果たしてトリノスは何が出来何をしていかなければならないのかを、４年前から現在に至るまで模索し続けながら支援をしています。今でも明確な答えは出ていませんが、トリノスとして彼らの住む世界と、これから生きていく社会と言う大きな世界をつなげるパイプ役になれることが出来ればと思っています。

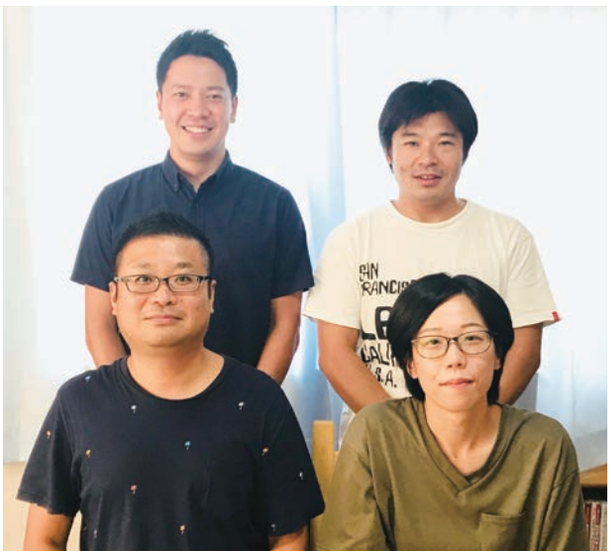
そのためには、トリノスに入居するまで社会との繋がりが希薄であった彼らに対し、社会の厳しさや現実を彼らが受け止められる範囲で伝え、徐々に社会との繋がりを強くしていく支援が必要になります。ただ、彼らは世の中にどのような仕事があり、自分はどのようなことが出来そうか、具体的にイメージ出来ない事が多いのです。

そこで、まずは、社会との繋がりを得て、その中で自分自身を見つめなおし、主観的にも客観的にも自分を評価し、そこから自分が目指す未来を考え、進んで行って欲しいと思っています。周りから見ると、決して上手な自立とは行かず、時には立ち止まってしまうこともあります。その時は私たちが再度話を聞きそっと背中を押してあげることで、彼らがもう一度社会との繋がりを求め動き出すキッカケ作りをすることが私たち自立援助ホームの大きな役割の一つと考えられます。

トリノスが開所に至るまでは、東京都との協議から始まり、地域の方々に理解を得られるよう説明会の実施や地域活動への参加、自治会への加入など、地域に根ざした施設となれるよう取り組みを行ってきました。現在では地域の方々にも活動の趣旨にご理解をいただき、青少年達に対しお菓子などを寄付していただいたり、社会福祉協議会が自立のための住まい探しに力を貸してくださるまでになりました。施設が地域に愛されるということは、そこで暮らす青少年達が地域の人びとに愛されることであり、広義に捉えると、彼らがこれから生きていく社会に愛されることになるのではないでしょうか。今後とも地域に愛され地域に根ざした施設となれるよう、地域貢献に力を入れて行きたいと思います。

彼らを取り巻く環境は決して優しいものではありません。しかしながら、そこには彼らの生活を応援してくれる人達が沢山います。見守ってくれ、時には手を差し伸べてくれる人達が大勢います。その手を彼らが自信を持ってつかめるようになるまで私達は彼らを応援し、支え続けることにより、青少年達が「トリノス」から巣立ち、羽ばたいていかれることを目指していきます。

トリノス全景



第２期トリノスチーム

Merry Christmas

今年も、法人の各施設でクリスマスを祝う行事を持ち、子ども達と一緒にこの一年間に感謝するとともに楽しい時間を過ごしています。この場をお借りして、寄付者の皆様に改めて御礼申し上げます。特に、この秋、（社福）二葉保育園自立支援・アフターケア基金の活用により、卒園生の入院への緊急対応等ができましたこと、本当に有難く、深く感謝しております。どうぞ、皆様も良いクリスマスをお迎えください。

「二葉支援の会」への寄付について

二葉保育園では、「二葉支援の会」が中心となって、法人内の各施設の事業や組織運営を支えていく活動をしています。ご寄付は、年一口5,000円以上をお願いしておりますが、金額は問わず、一人でも多くの方にご支援を頂きたいと思っております。ご入会・ご支援頂ける方はぜひ当法人本部までご連絡ください。

★当法人へのご寄付は社会福祉事業への寄付として確定申告をして頂くと税制上の優遇措置（寄付金控除）が受けられます。詳しくは当法人本部までお問い合わせ下さい。

「二葉支援の会」お問合わせ

社会福祉法人二葉保育園 法人本部

電話　03-3341-1205（平日10時～17時）
E-mail　info@futaba-yuka.or.jp

郵便振替
口座番号：00120－2－30321
口座名義：社会福祉法人二葉保育園

銀行振込
三菱東京UFJ銀行　支店名：四谷支店
口座番号：普通0506208
口座名義：（福祉）二葉保育園

クレジットカード
社会福祉法人二葉保育園ホームページの「寄付のお願い」ページからお手続き頂けます。

社会福祉法人　二葉保育園　概要

法人本部
所在地：〒160-0012　東京都新宿区南元町４番地
設立：1900年（明治33年）
理事長：井上 従子
常務理事：武藤　素明
理事：河津 英彦、押切 重洋、福田 敏朗、都留 和光、町田 とし江
評議員：宮沢 成実、鈴木 美邦、磯谷 文明、市東 和子、吉村 晴美、金子 恵美、潮谷 恵美、貫名 通生、浦上 充
監事：園 武友、乾川 日出夫
職員：４名

二葉乳児院・地域子育て支援センター二葉
院長　都留 和光
児童定員：40名　職員：90名
住所：〒160-0012　東京都新宿区南元町４番地

二葉学園
統括園長：武藤 素明　園長：小倉 要
児童定員：52名（グループホーム８ヶ所を含む）
職員：73名
住所　本園：〒182-0035
東京都調布市上石原２-17-７

二葉南元保育園
園長：町田 とし江
児童定員：110名　専門型一時保育：10名　職員：52名
住所　本園：〒160-0012　東京都新宿区南元町４番地

二葉くすのき保育園
園長：森本 裕美
児童定員：100名　職員：39名
住所：〒182-0022
東京都調布市国領町３-８-15　都営くすのきアパート１号棟

二葉むさしが丘学園
統括園長：武藤 素明　園長：菅原 淳史
児童定員　本園：60名（一時保護６名を含む）
グループホーム：18名、職員：65名
ファミリーホーム：６名、職員：２名
住所　本園：〒187-0011　東京都小平市鈴木町１-62-１

自立援助ホーム　トリノス
統括園長：武藤 素明　　ホーム長：渡辺 剛史
児童定員（男子）：６名　　職員：４名
住所：〒191-0021　東京都日野市石田１-28-10

二葉とこども28号　2019年　12月20日発行　編集・発行　社会福祉法人　二葉保育園「二葉支援の会」
〒160-0012　東京都新宿区南元町４番地　TEL：03-3341-1205　法人本部事務局　http://www.futaba-yuka.or.jp